
春男の足元には（春編）

てるり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春男の足元には（春編）

【Nコード】

N8518C

【作者名】

てるり

【あらすじ】

春男はペンネームである。だが、普段も春男と呼んでいる。しかし、最初からではなかった。

呼び名

呼び名

オレは、春男という作家の担当をしている、佐々木洋介という春男の四番目と六番目の担当者だ。ほかにも何人か、春男の担当になったが、一人残らず、やめている。それも、担当が代わるということではなくて、出版業からいなくなっているのだ。その春男は、出版社のなかでは、呪われているんじゃないかという噂まであった（らしい）作家だったようだ。

オレは別に、昔から春男と呼んでいたわけではなかった。最初は仕事の相手だったし、名前にも聞き覚えがなかったせいか、誰なのか、思いつきもしなかつと言うよりも、考えもしなかつたというほうが正しい。

最初に呼んだのは、春男先生というところから始まった。

「春男先生、作品、受け取りにきました。」

「はい。」

そういつて、しばらくのうちは、フロツピーだけを渡される日々だった。オレは、春男の次の担当者が決まるまでの中継ぎだったのだ。オレは他に何人かの担当をしていて、その間に春男からフロツピーを受け取るだけの仕事をしていたのだ。

あれは、三回目だっただろうか。いつもは、すんなり渡してもらえる、作品がまだ出来上がらないからと、家の中で待つことになった。そのときに、本棚に並ぶ、自分と同じ高校の卒業アルバムを見つけたのである。編集長からすでに、同じ歳だとは聞かされていた。まさか、そのアルバムを開けてみるわけにはいかない。オレは、家に帰るなり、自分のアルバムをめくりだした。

「おかしいなあ、ないぞ。春男……、春男ねえ……。そういえば、苗字、なんだ？」

翌日のことだった。編集長に聞いてみた。

「あの、春男先生の名前なんですけど、苗字ってなんですか？」

「ん？ああ、春男はペンネームだ。言わなかったか？あいつの本名は、秋山だ。秋山 亜樹斗。あの、マキさんの息子だ。」

「マキ？」

「料理研究家の。知らんのか？」

編集長は、ちよつと顔をしかめて見せた。オレは後に、この編集長がそのマキさんの熱狂的なファンだということを知ることになるのだが。

「あー、あいつ、高校のときの同級生だ！」

「なに！？」

その時の編集長の顔をちよつと見ていた同僚は、まるで、餌を見つけた鷹かワシのようだったと、こつ語る。しかし、オレはそんなことに一切気がつかなかった。

「あー、そうだ、どこかで見たような気がしていたんですよ。そうか、あいつかあ。」

「……仲がよかったのか？」

「良かったら、すぐに思い出しますよ。いや、腐れ縁っていうのかなあ、たしか、小学校の途中から高校の卒業まで同じ学校だったんですけどね、一回も同じクラスになったことなかったんですよ。だから、話したこともほとんどなかったなあ……。」

「お前、いま、作家、誰を担当している？」

編集長はにつこりと笑った。オレはそのとき、初めて、なにかまずいことを言ったような気がしてきていたが、後の祭りだった。そこから作家を二人外されて、春男の担当になり、オレはなぜかいまだに出版業界にいる。

編集長はいまだに、酒が入ると、俺の選択は間違っていないかった、出版業界からの若手流出を防いだのだ、のろいを振り払ったのは自分だと、豪語する。

オレは最初のころは出版社をやめることばかり考えていたはずが、

すっかり春男に慣れてしまった。なれというものは本当に怖い。

そして、今日も春男の家へとフロツピーを受け取りに行くついでに、ご飯を食べようと考えているオレがいるのだった……。

生首 (前編) (前書き)

生首（前編）

生首到来

春のうららかなこの季節、にはまだ早い。昼間はだんだんと温かくなっているが、夕方にはまだ寒いのだ。オレは、いつものように春男の家に向かっていた。

春男の家にはいろんな人がやってくる。春男が変わっているのからなのか、春男を気に入る友人たちが変わっているのか。しかし、オレは友人としてではなく、仕事だ。ほとんど毎日のように家に行っているが、仕事だ。

それはともかく、今日はいやな予感がしている。春男の家に行く前には一応メールで行くと知らせておく。すると、わざわざきつちりと返事が戻ってくる。しかし、今日は、いーよーと、最後の棒線が多い。面倒くさがりの春男がわざわざ追加していると事が気になる。

「春男ー、きたぞー。」

ドアを開けるとそこには。

「いらっしやい。」

「やあ。」

声が二つ重なった。

「ああ、お父さんがいらしていたんですか。」

そこには、春男の髪を切る春男の父親がいた。春男と同じように、につこりと笑う。

「元気だったかい、佐々木君。」

「はい、おかげさま……で。」

部屋の奥に進むにつれて、自分の笑顔が凍りついた。

春男は、いつもオレが座っているソファに座っていた。そのうしろに、髪を切っている春男の親父さんが立っている。つまり、他には誰もいない、はずだった。

しかし。

普段、食事などをしている机の上には、首だけが大量に置かれていた。

もちろん、ホンモノではない。さすがに、そんなことはない。しかし、いくらマネキンでも頭だけがこんなに飾ってあると気持ちが悪い。

「こ、これは？」

そこにトイレの水が流れる音がした。振り返ると誰かが出てきた。

「あ、お客様ですか？」

「いいんだ、僕の編集を担当してくれている洋介だよ。洋介、彼は父さんが髪の手切り方を学んでいる、昭二君だよ。」

「こんばんわー。」

その人はにこやかに微笑んだが、なぜかオレの顔はちょっと引きつった。

「どうも。」

偏見かもしれないが、通常の男が、ピンクとブルーに髪を染めて、小指を立てて体をくねくねさせて歩くだろうか？

「じゃ、この首はカットの練習用？だけど、なんで、ここで？」

「ああ。こいつの髪を切りに行こうと思っていた頃だったから、ちよつといいと思つてついでに来てもらつたんだ。」

「いやいや、ボクなんか。秋元さん、基本的にとても覚えがいいから、あまり教える事がないほどだよ。」

その人は、ほがらかに微笑んだのだが、オレは個人的にはどこで、春男の親父さんとこのくねくねした人が知り合いになつたのかを知りたい。

よく考えると、春男の友人に個性的な人が多いのは春男の父親の影響かもしれないと、だんだん感じるようになっていく。春男の父親はどうみても、裏世界の人間がよくて、船の船長か、大工の棟梁だろうという強面の人だ。そんな人となり昭二君をつれて歩くようなタイプには見えない。

「えっと、どういう知り合いなんですか？」

「拾った。はははは。」

春男の親父さんと春男は笑ったが、オレの顔は引きつった。シャレにならない。

生首（後編）

「違いますよ。僕の料理の師匠なんです。恋人に美味しいお菓子が作りたくて。」

ニコニコした昭二君が言った。それならある程度納得出来る。春男の父親は顔にまったく似合わず、料理などなんでもこなせる主婦の鑑のような人だ。それにしても、恋人が女性なのか、そうではないのかはあえて聞かないでおこうと思った。

「その代わりに、カットを教わっているんだ。」

「へえ。」

やっと納得のいく理由がわかって、ほっとした。すると。

「綺麗な髪ねえ。」

綺麗な女性に触られるならまだしも、くねくねした男性に急に触られると、びっくりする。

「な、なんですか？」

「ねえ。その髪、ちよつと切らせて。」

「え、えーと……。」

オレがためらっていると、春男は言った。

「いいじゃないか、減るものじゃないし。彼、うまいよ。」

「いや、切ったら、減るだろ！」

「でも、ほらあ、床屋代金が浮くと思つて。ね？」

「はあ。」

結局オレはとくに断る理由も浮かばずに、髪を切ってもらうことにした。ちよつと伸びていて、そのうち行こうと思つていたところだったのだ。たしかに、腕はいいのか、綺麗に切れていて、帰り道、首が少々スースーしていた。

その三日後。

オレの隣の席にいる同僚の女性はおばちゃんだが、最近の流行には

追いついていたいのか、よく雑誌を読んでいる。

「ん？」

オレは彼女の読んでいるページに目を移した。

「なに？」

「この人、昭二……は？カリスマスーパー美容師？」

「そうよー。知っているの？まさか、佐々木君が美容に興味があるとは知らなかったわ。この人に髪を切ってもらうのに、1年待たなきゃいけないのよー。すごい売れっ子なんですって。今度、アメリカに進出ですって。すごいわねー。」

目をきらきらさせて感動している彼女に、まさか、自分の髪をついでに切ってもらったとは、口が裂けてもいえない。ついでに、どうみても、写真では男前に写っているのに、本人はくねくねした感じの人だとも、オレの口からは言えなかった。

「なんだ言わなかったんだよ！」

と、春男から原稿を受け取るなり、となりから借りてきた女性雑誌を見せて後から文句を言うと、春男はしれつと言った。

「別に有名人でもそうじゃなくても、髪がきるのがうまけりゃ、それでいいじゃないか。」

「それはそうだけど……。」

「カット代も浮いただろ？」

「浮いたけどさ！こんなに有名人だとは……。。」

「え、でも、君、知らなかったんでしょ？」

「知らなかったけど……。」

「つまり、その程度の有名ってことだよ。それとも、君の有名の判定は雑誌に載るか載らないかで決まるのかい？」

春男に、口で負けるとかなり悔しい。いつの日か。春男がビックリするような有名人と知り合いになってやると、オレは心から思った。

春男の家の事情

春男の家の事情

春男の実家には、春男の両親だけが住んでいる。もう一人いたはずの妹は現在、外国にいる。春男の母親は有名な料理研究家で食材を求めて、あっちこっちに出かけている事が多い。ところが。

「休みをとった？それじゃ、おふくろさんは最近、何やってるんだ？」

「それがねえ。」

春男がため息をついた。

「ひさしぶりに、家にずっといるんだ。父さんが愚痴をこぼしていたよ。あれこれ家の中を掃除しているんだろうけど、いままでした事が無かったもんだから、余計に汚れていくつて。あれじゃ、定年退職した旦那さんが急に家にいるようになった後の奥さんの愚痴だよ。」

「……おふくろさん、料理以外はできないのか？」

「できないわけじゃないんだけど、ほら、父さんのほうが細かいから。」

オレはなんとなく納得した。春男の父親の趣味は家事だ。それも、裁縫に関してなど、インターネットで服の注文がくるくらいの腕前だ。普通の編物やレースも編むそうだ。それを仕事の合間にやっている。

家ではこつそりと料理もすれば、掃除も洗濯もアイロンがけまでやる。ただ、妻には黙っているという難点が問題なだけだ。

「それにしても、家の中が綺麗な事によく疑問を思わないな。」

「父さんが帰ってくるのが遅いからね。」

オレは怪訝な顔をした。それに気がついたのか、春男は付け足した。「普段は家に誰もいないから、汚れないものだと思っているみたい。」

休みの日だけはハウスクリーナーの人が来てくれるし。」

オレは頷いた。

「あー……あの、次々に変わる人たちか。」

「どうにかしなきゃとは思ってるんだけどねえ。会社、一つ潰したし。」

オレは目を丸くした。春男の家に、休日だけは家政婦さんがきていることは知っていたが、会社を潰したというのは初耳だ。

「潰した？」

「登録していた人たちが少なかった上に、やめていったもんだから、営業できなくなったみたい。ほら、父さんの方が、できるもんだから。」

「……怖い話だな。」

「この間なんか、料理にかつおぶしのパック使ったって、嘆いていたよ。」

「普通だろ？」

「いや？ 削り器で削る。うちにもあるよ。」

平然と春男は言った。

「それで、今度の人には料理を作るのはやめてもらったらしいよ。」
「それでは長続きしないだろう。」

「なんかいい案、ないかな。」

春男の家には、人とはちよつとずれた悩みがあるようだ……。相談があるというから、春男の家に来てみれば、仕事とは何の関係もない話だったようだ。オレはため息をついた。

「こう……、家政婦でもできるような、それでいて、黙っていてくれるような。なおかつ、やめなくてももらえるような仕事って無いかな？」

オレは考えてみた。そして思いついた。

「ネット販売を手伝ってもらっているのはどうだ？ パソコンはできなくても、電話番くらいならできるだろ。ネットを使わない人たちからも注文を受け付けることがあるから、そんな人が欲しいよう

なことを言っていただろう。」

「お。いいかも。じゅあ、今度父さんが来たら言ってみるよ。」

春男はにこやかに笑った。見事にオレの案は通ったのはいうまでもない。

春男の電車内

春男の電車内

あまり趣味ない春男だが、美術品だけは興味があるらしく、よく見に行く。マニアックなものも多いがたまには、普通のものも見に行くようだ。

その日の春男の話は。

「おもしろいつことがあつたんだよ。」から、始まった。

「なんだ？」

オレは新聞から目を離した。春男の話は基本的にきいておかないと後でひどい目にあうことが多い。

「一昨日のことなんだけど、美術館に行つたんだ。フランスの彫刻を見に。で、電車に乗っていたら、違うドアから二人乗ってきたんだ。一人は若い女性でもう一人は君くらいの年齢の男性だった。」

「それで？」

「二人は隣どおし、真ん中の座って同時に鞆から取り出したんだ。女性は携帯を。男性は本を取り出したんだ。そこしか席があいてなかったからね。」

「めずらしい光景か？」

その言葉に、春男はにやりと笑った。

「男性は気がつかなかったんだ。自分が読んでいる本の作者が横にいるってことに。」

「まじで？じゃ、その女性が？」

オレは目を丸くした。

「間違いないよ。いつだったか、なにかの集まりで見たことがあるんだ。君と同じ佐々木って名前だったから覚えてたんだ。なかなか綺麗な人でもあるしね。」

「へえ。」

「しかもね。その人、外にいる時は作品を携帯で打つことがあるんだって。そのほうが、家で書くよりもいいアイデアが浮かぶんだって。それを聞いて、僕も真似してみたけど、電車に酔っただけだったよ。」

げんなりしたように春男は言った。

「じゃなにか？もしかしたら最新作が横で打たれていたかもしれないってことか。」

「そうなんだよ。もうそれを見ておかしくてさあ。男性が持っていた本にカバーがかけてなかったから、わかった話なんだけど。」

「その女性の作家の方は、自分の作品が隣で読まれていることに気がつかなかったのか？」

「たぶんね。僕は途中で降りたから結末までは見られなかったけどね。」

本気で残念そうに春男は言った。

「そんなことってあるんだなあ。」

「僕も会って見たいね。自分の本読んでいる人に。偶然。」

「あー難しい注文だな。まずもう少し売れないとなあ……。」

オレは瞬時に春男の期待を壊した。いや、わざとではない。そして嘘でもない。春男の本の場合は、カバーがどうのこうの、というレベルの話ではなく、販売数の問題だ。

春男もわかっていいるのか、すぐにうなずいた。

「だよねえ……。がんばろっと。」

春男はまたパソコンへと向かい出した。

しかし春男ががんばるとそれはそれで問題が起こる。書きすぎてしまう傾向があるのだ。オレは先にそうなることを覚悟した。今回の作品は長編になるかもしれない。いや、ページ数はもうすでに決まっている。だから、それを削るオレの手間が増えるだけのことだ。

オレは新聞を引き続き読みながら思った。はつきりいつて、春男の記憶力は悪い。感心するほど、悪い。何回か会ったことがあるだけではまず覚ええない。それが、美人であろうと不細工であるとあま

り関係ない。性別も関係なく、年齢などもつと関係ない。
そんな春男が電車の中で見つめていた女性が本当に作家だったのか。
もしかしたら、全然別人の可能性もある。むしろ、そのほうが高い。
しかし、それは追求しないでおこうと思った。

春男の感心

春男の感心

春男の常識というか、考え方は何か少し、どこか、ずれているような気はしていた。

いや、作家には変わり者が多い。しかし、春男の場合、だんだんそれが悪くなっていつていつていような気がする。

するのは、毎日接しているオレだからかもしれない。

「君ってすごいよね。」

突然、春男が言い出した。人間誰でも褒められたらうれしいだろう。しかし、褒められるような理由がなかったならとりあえず尋ねるだろう。

「なんでだ？」

「君にメールをすると、かなりの率で返事がメールの返事が早く帰ってくる。」

それはそうだろう。仕事場で、いつどの作家からかかってくるかわからない携帯は、基本的に机の上だからだ。それも音楽が鳴るようになってある。担当者のほとんどはそうしている。

出かけるとも、首から下げてでかけるのだ。

しかし基本的には、仕事中に携帯に返事ができるような職業は少ないだろう。その説明を聞いて春男は納得したようだ。

「そっか。僕はずっと家にいるけど、みんなは働いてるんだもんねえ。」

「まて……。」

その考えは、なにか間違っている。

春男も作家なのだから働いているのだ。一応。発行部数は少なくても、あまり売れていなくても、一応、作家を職業にしているのだ。つまり、仕事を外ですか、家の中ですかの違いなだけだ。

「そつか。家の中の職業ねえ。誰かいたかなあ。」

春男はぼんやりと考えはじめた。

それにしても。

春男の友人は変わった職業が多い。この間など男性の友人からパソコンにメールが届いた。下着が写っていたので春男がそんなものを見ているのはめずらしいと思ったら、送ってきた友人がデザインしたものだ。会社で賞をもらったらしい。

他にも世界の風景の写真が来ていたり、自分がでる芝居のチケットを送って来る人もいる。サラリーマンの方が少ないくらいだ。

そんな職業をしていれば、春男のメールに返事をするのも、面倒だと思うだろう。なんせ、春男のメールは質問が多い。それも考えさせられるものが多い。ただでさえ、忙しいのに、余計に頭を使うことは避けたいと思うのが、本当のところだろう。

オレは、メールが返ってくるのが遅いのは、そういう理由であろうことを黙っていることにした。それに気がつかずに一生感心していてもほしいものだ。

しかし。

「お前のメールに問題があるんだよ。いいか？普通の人に、青い目のダルマがなぜないのかなんて、聞くなよ！」

「だって、目の青い招き猫はあるんだよ？ダルマがあっただっていいじゃないか。招く手だって、逆向きになっているんだし。」

「そりゃ、伝統の日本文化に青い目がなかったからだろうが。」

「招き猫だって、日本文化じゃないか。」

「それに青い目の人がダルマなんか、使うか？ブルーの習字なんかあるか？」

「……使わないとは言い切れないだろう？そりゃ、さすがに、青い目のこけしは、なくてもいいと思うけどさ。」

だんだん、春男が弱気になってきた。

こんなやりとり。メールで誰かがしたいと思うだろうか……。このメールに、たとえどんなに返事が遅くなっても、返ってくる

るだけでも、十分にありがたいと思うほづがいいんじゃないかと、オレは思っている。

作家だけ

作家だけ

世の中には、職業選択の自由という言葉ある。しかし、それが、無い奴もいる。いや、身体的な資格がどうのこうのという以前の話だ。勉強がどうのこうのというよりももっと以前の話だ。

「聞いてくれよ。」

春男はパソコンの前から、くるりとこっちを向いていった。

「なんだ？」

「切手の自動販売機があるんだ。」

……それがなんだというのだろう。いまさら騒ぎ立てるような発見だろうか。むしろいままで知らなかったことの方が驚きだ。

「だから？……まさか、知らなかったのか？」

「知っていたの？」

逆に春男は目を丸くした。

オレは溜め息をついた。そんなことも知らないような作家の小説など誰が読みたがると言うのか。

いまのところ春男の本は、ベストセラーからはかなり遠く、ベストのべの字も見えないが、売り上げは地味に伸びている。おそらく春男の友人たちが、やっとこいつが本を出しているということを確認し始めたからではないかとオレは思っている。

「いいか、よそでその話をするなよ。笑われるからな。」

母親が言いそうなことを言った。

「わかったよ。日本で始めて見たからちよつと嬉しかったただだよ。」

そう言うと春男はくるりと後ろを向いてパソコンに向かい出した。外国のことは分かるのに、自分が住んでいる日本のことを知らない。それも、そんなにめずらしいことでもない範囲のことをだ。

作家としてというよりも日本人としてどうなのか。溜め息とて出る
と言うものだ。

「もつとでかけろ。世間を見ないと、取り残されるぞ。」

「面倒でねえ。」

いつもの台詞で春男は片付けた。

春男はよく、困ったら作家をやめるだけだと言うが、社会に生きる
オレからすると、こいつに社会人は逆立ちしても無理だと思う。と
いうより、まず雇われない気がする。へたをすると、職につこうと
しないかもしれない。

万が一なにかの手違いで雇われたとしても一か月くらいでクビにな
るだろう。もしかしたら、三日かもしれない。はっきり言ってこい
つに職業選択の自由はない。

作家しかできないということはどうも自覚していないようだ。

料理はできるだろうが、それを紹介することも、面倒だといって
やらなさそうだ。春男の母親みたいに食料を買いに行くのまで面倒
だといいそうな奴だ。食べるものが無かったら、食べるのも面倒だ
と言い出そうな気さえもする。

外にも出ずに、ずっと家の中で誰とも会わずに、じっとしていそ
うだ。

感心があつて見に行くのは美術品だけ。それも自分で造ろうとはし
ない。買ってきて集めるということもしていない。その電車代さえ
なかったら、見にさえも行かないかもしれない。

オレも望みは実にささやかだ。ひたすら、こいつが最終的には、
自分の作品だけで自立できることを望むばかりである。

「それで。切手は買ってみたのか？」

「その販売機で？」

「ああ。」

「いや？だつて、買う必要がなかったし。壊れていたし。」

おそらく、買ったら、その報告の話があるだろう。それが、次の作
品で出てくるかもしれない。オレはそれをのんびり待つことにした。

パズルに愛を込めて

パズルに愛を込めて

「臨時刊行？」

「そうだ。」

朝から急に呼び出されたオレは、編集長の言葉に目を丸くした。あいもかわらず編集長はしかめた顔をしていたが、最近その、春男に対するいやいや度が減ってきているような気がするのにはオレだけらしい。

「前回の作品が良かったらしい。……世の中、間違つとるがな！」編集長はお茶をすすりながら静かに怒りを込めて、言った。

「……。あれがですかあ？いや、話は面白かったんですけど。珍しくオレの方が顔をしかめた。」

それは半年ほど溯つたある日のことだった。春男の部屋で、作品が出来上がっていくのを待っていると、ふいに春男が聞いた。

「あのさ、出版社って印刷にどれくらい費用、かけられるの？」

「は？」

「いや、ほら、色を増やすと高くなるんだろう？」

「そりゃな。」

「あれって作家が払うからやってくれって言ったらやってくれるのかな？」

「お前は無理だ。」

「なんで？」

「人気作家ならまだしもお前じゃな……。」

「そうかあ……。」

話はそこまでだった。話は嘘ではない。春男は色を印刷できるほど、金をもらっていないし、売れてもいないのだ。オレは不安になって、

その日にもらった作品をよく読んだが、そこにはパズルのパの字も入っていなかった。いつものただの質問なのだろうと、オレはほっとおいた。

あのあとどうしてもっと詳しく聞いておかなかったのかと、後からかなり、落ち込んだものだ。春男の言うことに油断は禁物、あれだけ、痛い目に合っているというのにだ。

それからしばらくしてある物が売られた。

それは、他社の趣味別に分けられている雑誌で紹介されていた。

『作家パズルデビュー!!!』

パズルを完成させるとショートショート物語が読めるとのことだ。そしてそのページには春男の写真はないものの、コメントがのっていたのだ。パズルに、使われた絵や画家のことも載っている。

「どういうことかな？」

編集長ににこやかに聞かれてオレは言葉につまった。そのときの編集長は、怒っている時よりも青筋が立っていたと、のちに同僚は言ったくらいだった。

オレは本当に、ひさしぶりに春男の家まで走った。

「春男！」

「やあ。なんだい、慌てて。」

「なんだよ、これ！」

オレはその記事を春男の顔の前まで持っていった。

「あ。よく気がついたねえ。」

春男はあくまでも、のんき者だった。

「気がついたねえ、じゃないだろ。どうしたんだよ。」

「いやあ、僕の友人がね、その記事を書いてるんだ。」

「このパズルのか？」

パズルに愛を込めて（中編）

「そう。だけど、いまどき、ピースのパズルなんて、書くことがなくて、どんどんページが減っていくって嘆いて、このままじゃ廃刊になるんだって言うから。」

「で？」

「本当は君の会社に頼みたかったんだけど、絶対断られるだろうし。君も反対するだろう？」

「当たり前だろ！どこの世界にショートショートをパズルにするやつがいるんだよ！いや、普通考えつかないだろ！」

「だから、自費で作ってみた。ついでに、売れてない画家の友人がいるから、そいつに背景を頼んだ。記事に載せたら、彼の両親が喜んでくれたよ。」

「そういう問題じゃないだろ！作ってみたじゃねえだろ。そんな金がどこにあるんだよ。」

「僕の少ない貯金と父さんから。」

「親父さん？」

春男の父親はサラリーマンだが、それ以外にもあれこれ仕事をしている。妻には黙って。

「ほらインターネットでの副業がなかなか好評で臨時収入があったらしいんだけど、別に使い道がなかったみたい。この間、欲しがっていた電機釜、送ったし。そのお礼だつて。」

金があるなら貯金すればいいと思われるだろうが、妻に内緒の金だ。金があるなら自分で電機釜くらい買えばいいじゃないかと思われるだろうが、金があることを妻にばれてはならない。夫はそのためであれこれ工夫をする日々だ。

「最初は、絵を入れないつもりだったんだけど、偶然友人に会ったもんで。絵を書くついでに、ちよつと金も出してくれたんだ。」

「どこで、会ったんだ、この画家に。」

「ん？ああ、この間、道であつた。あんまり売れてないから、田舎に帰ろうかと思つてゐるつていうからさ、その前につて、誘つたんだ。」

オレは基本的に、知り合いにばつたり会つということは、ほとんどない。しかし、なにゆえ、春男にはそんなに知り合いに会ふのだらう。それも会つても、オレにいいことは基本的にはなにもないという、このオチ！実に最悪だ。

基本的に作家というものは、出版社から依頼されて、作品を書き、それを印刷してもらい、作品として世の中に作品として出ているものである。他には、そんなに利益の上がない作品は、自分の費用を用いて、印刷してもらうことが出来る。

しかし、作家として、すくなくとも、作品だけで生活している作家が、誰も言わずに、自費を使つて出すだらうか？

オレと春男は同じ年だし、高校までは学校もずっと同じだった。

しかし、今の時点では違いがある。まあ、はつきりいつて、給料が大きく違う。オレはサラリーマンだが、春男は自営業だ。人気作家とでもいうなら春男のほうが給料はいいだらう。しかし、いまのところ、どうかんがえても、オレの方が稼いでいる。

そんな状態で、どこの世界に、ショートショートを自費でパズルにして出す作家がいるというのだらう。

いくら、売れない画家が背景に少しを書いているとはいえ、決して安くはないはずだ。

しかし、春男のほうはあまり、貯金だとかを気にしていないようだ。絶対に老後に困る気がするのは、オレだけのようだ。

春男の両親の収入を考えると、春男一人くらい、食べていけるのかもしれない。春男の妹は、春男よりもどう考えてもしっかりしているので、大丈夫だらう。

「なかなか面白いだらう？話もそれなりに面白いよ。」

春男はにこやかに微笑んでいた。

「ただねえ、あれには欠点があつた。出来上がつてから、気がつい

ただけどさあ。」

オレに言わせれば欠点だらけのような気がするのだが。

「話は基本的に起承転結に書かれているだろう。だから後ろの方からパズルを埋めていくと話のオチが見えるんだよねえ。」

そんなことに作るまで気がつかないとは、これでも話を考える小説家なのかと改めてオレは溜め息をついた。

パズルに愛をこめて（後編）

それから、数日後の今である。

「あの、パズルの作品のことですか？」

オレの顔はまだ、しかめたままだった。

「あれが、パズル愛好家の間で話題になってな。そんなものがあるとは、思いもしなかったがな！向こうの会社とこつちとで協力することになった。かなり！不本意だがな！なにか、あの作家に書かせる。ただし、今回は普通の本だからな。」

オレは溜め息をついた。

どうしてオレは作家という職業から離れて行くようなことばかりしている奴の担当なのだろうか……。

例のパズル作品のせいで、春男はかなり酷評がされていた。形式だけのうすっぺらい内容だとか、書籍に対する冒涇だとか、作家を名乗るのもおこがましいとまでいわれていた。まあ、それは、作家や出版業界の間で囁かれているだけで、あまり外にはでなかったようだ。

せいぜい、載つても雑誌の端っこだった。

そんななか、編集長は言った。

「いいか。本人には見せるな。」

春男にいい印象を欠片も持っていない編集長にしては珍しい意見だと思ったが。

「それで、落ち込んで、マキさんに迷惑をかけたらどうする！」

と、力説する編集長を見て、納得した。本当に、編集長は奥さんの次に、マキさんを大事にしているようだ。

ところで、編集長には言わなかったが、春男はすでにあれこれと言われていることを知っていた。テレビやファンからの手紙に一喜一憂、影響を受けやすい春男だが、なぜか雑誌は気にならないようだ。「自筆なら考えてもいい。だけど、印刷されているものじゃあねえ。」

ホントに、本人が言っているのかわからないし。」

と、いうことだったようだ。

「とにかく、パズルは一回きりだぞ。今回、何か書くにしても、書籍だからな！」

ため息混じりに言った春男は言った。

「そうだね。やっぱり、パズルだと、埋めている途中でオチが先に読まれてしまうからなあ。今度やるなら立体パズルだよなあ。」

「そういう問題じゃない！いいか、絶対に、ダメだからな！」

「わかったよ……。」

やっぱり、オレは怒鳴りつけた。どうやら、懲りてはいないようだ。こんなことで、懲りてくれるようならとくに作家など辞めているに違いない。わかつてはいるのだが、どうも、並の神経は持ち合わせていないようだ……。

ところで、その後、いいことが二つあった。

売れなかった春男の友人らしい画家の絵は、ちょっと注目されたことによつて、絵が少し売れたらしい。お礼だといって、その人は小さな絵を春男に渡していった。このまま大物になったら、これが売れるかもしれないと、春男は笑っていた。

例のパズルの雑誌は、同じようにちよつと注目されて、売上が伸びたそうだ。記事を書いた人物によると、廃刊はもうちよつと先になりそうだとのことだ。しかし、まだ廃刊から完全に遠いたわけではないようで、ほかになにかパズルでできるんじゃないかと、新たな材料を求めて走り回っているようだ。

しかし、いいこともあれば、悪いこともある。

春男だ。

今回、パズル雑誌と協力して、本を出したのだが、売れなかったのだ。もちろん、春男のファンは買ってくれたのだが、パズルのファンまでは巻き込めなかったようだ。

編集長は、頭を抱え込み、一層、春男のことが憎らしくなったよ

うだ。

春男は何事もなかったように、今日も作品を打っている。
オレはため息をつき、あきめた。

春男の母を訪ねて

春男の母を訪ねて

オレはまったく日本から出た事がないだけではなく、英語も苦手だ。話しかけられるのもダメだが、電話はもっと弱い。それは、春男にかかってきたものだった。

「出てー。」

春男はのんきに言った。

「\$%&#:@・%\$アキト？」

オレがえらく早口の英語の中で唯一聞き取れたのは、春男の本名だ。「あー、ウエイト！春男、電話だ。なに言っているかさっぱり分かんらん！」

春男が電話に出た。

「はろあ？」

なんだか、やけにむこうが一方的に話しかけているのか、春男はうんうんと頷いてしかない。頷いても見えないだろうが。

「OK」

話が終わった。

「誰だ？」

「母さんの知り合い。明日、日本に来るって。」

「まて？なんで母親の知り合いから電話がお前にかかってくるんだ？」

「母さん、明日チベットから帰ってくるんだ。だから。」

「チベット？チベットって、あのー山の、あれか？」

「そう。なんでも高い地域の動物の栄養価を見て来るんだとか言っていたけど、あれはただ単に、行きたかっただけだろうね。」

「マキさん、あいかわらず、行動的だな。で、外国人の友人が来るのか？」

「いや、菓子作りの先生だよ。本人は先生なんかじゃないといはっているけど、母さんは勝手にそう呼んでるんだ。教えてくれる人は、誰でも先生だって。」

「へえ。じゃ、今度、マキさんは菓子作りをやるのか？」

「んー。」

春男は渋そうな顔をした。

「ちよつと違う。菓子を作ってもらって、それを見ながら、偽物を作る人との仲介になる。」

この説明で、誰がわかるというのか。いくら、春男との付き合いが長いオレでもわからない。こいつのよくないところは、そういうところなのだろう。まずは、自分の分からないところから聞いていく事にした。

「偽物って何だ？」

「ほら、レストランとかで飾られている、ロウでできた、レプリカ。」

「そのレプリカを、誰が作るんだ？」

「僕は知らないんだ、明日、会うそうだよ。」

なるほど、だんだんと話が見えてきた。

「つまり、明日、マキさんはお菓子作りの先生とレプリカを作る人とも会うんだな。で、先生はホンモノの菓子をづくり、レプリカを作る人は、それを見て、作るって事だな？」

「そうそう。母さんは、両方と知り合いだから真ん中にいるんだ。」
「なるほど。」

やつと話が見えてきた。それにしても。

「なんで、そのお前の家の電話番号を知ってるんだ？」

「母さんが教えていくんだよ。自分がいない時は、僕のところにかけてくれた。僕なら大抵家にいるし、言葉もちよつとならわかるしね。」

「なるほど。」

オレは頷いたが、春男と知り合いになって、春男の母親のことに

も詳しくなっていく自分が少々怖い今日この頃である。

春男の味覚

春男の味覚

春男は料理がうまい。作るのもうまいし、はやいのだが、見た目には一切こだわらないせいか、見ただけではうまいか、まずいか分からない。しかし、食べてみると、結局全部食べてしまうのだから、味もうまいのだろう。

おそらく、味覚もいいのだろう。たくさんある、スパイスやら調味料やらを使い分けて、料理を作るのだから。

それは、料理研究科の母親のおかげと、いつか、せいというか。しかし、それだけ春男本人が味にうるさいかというと、それがそうでもない。春男の母親の作るものはどちらかといえば、実験に近いものがある。それを幼い頃から食べさせられてきたのだから、あまり味にはうるさくはないようだ。日本から出て行っても、食の違いで困ることはなさそうだ。

問題はこつちだ。

オレが春男の家で食べるものは、春男が作ってうまいと感じたものが多い。おかげで、美味しいものばかり食べているオレの舌ばかりが、こえていく。

ついでに、最近、コンビニの弁当の味が濃いような気さえしてきている。インスタントラーメンなど、ここ最近、食べてもいない。

こんなときに、オレはしみじみ結婚したいと考えるのだ。そうしたら、弁当を作ってもらえるのに。

そうばやいたら、同僚の女性は怒った。

「それじゃ、弁当が欲しいために結婚するみたいじゃない！」

しかし、オレにその反論はあまりできなかった。

「いつそのこと、彼に弁当でも、作ってもらったら？」

と、そこまで言われたが、さすがにそれは断りたい。そんなことを

したら一生そばにいる羽目になる。オレはまだ、こいつの担当をやることをあきらめたわけではないのだ。

じゃあ、春男に作家をやめてもらい、コックにでもなってもらえばいいと、愚痴を聞いたオレの友人はいった。

しかし、春男には料理人には決してなれない理由がある。

それは。たとえば、なにかの料理の味見をオレがしたとする。

「味が薄いような気がするなあ？」

「ん？じゃあ、そこらへんのもの、適当に入れて。」

春男は、調味料を差し出した。

たとえば、なにか煮物をしていたとする。

「これは、どのくらい煮るんだ？」

「んー。適当に。火が通ってて、こげなきゃ、いいよ。」

これだ。

つまり、春男の作るものに、レシピがないのだ。自分が思う量を適当に鍋などにいれて、自分で好む味を適当に作る。なにやら、たくさん母親から送られてきている調味料があるのだが、どれがどれだけ使われているのか、さっぱり本人もわかっていないようだ。

それが、なくなっても、基本的な醤油や砂糖のような調味料以外は、とくに自分で買いに行くこともないようだ。

これでは、人に教える料理人にはなれまい。なれるわけがない。まあ、その前に修行の段階で、クビになるのが目に見えている。基礎など繰り返しやるのは、面倒だと言いつ出すだろうからだ。

「料理はいいんだけど、菓子はねえ、きつちり、しつかりやらないとできないんだよ。そういうのが積み重なっていけば、いいものができるんだけど、それが面倒で。」

そんな理由で春男は菓子をあまり作らない。おそらく菓子も春男の父親が作れるのだから、春男も作れるのだろう。

しかし。たんに、味覚のよさと、それを作る技術があるだけではどうにもならないことがあるのだと、春男を見ているとしみじみ思うのだ。

恐怖の一瞬

恐怖の一瞬

オレがそのことに気がついたのは、春男の服のせいだ。春男はそんなに外に出ない。しかし、服は毎日変えている。だが、変えている筈なのに、同じような服を着ている。

「なんでだ？」

「父さんの手作りなんだ。」

「ああ、なるほど。……なんで、普通のは着ないんだ？」

「なんがか、きつくてねえ。」

それだけの会話でオレは悟った。春男はまた太ったようだ。手作りの服ばかり着ているのは、おそらく春男の父親がどんどん大きな服を作りつづけているからに違いない。オレは春男を連れ出すことに決めた。

「今度、恐竜の骨見に行こうと思ってねえ。」

春男がうれしそうに語ったのをオレは聞き逃さなかった。

「オレも行く。」

「え？意外だね。いつもなら行くの嫌がるのに。」

「招待されているのはオレだからな。」

「じゃ、道は君が知っているね？」

「ああ。」

「なら、いいや。」

オレは細く笑った。そう、春男は方向音痴だ。それもかなり、ひどい。トイレに行くといって出かけたら、そのビルの外から戻ってきた事があった。それほどひどいのだ。普段、春男が趣味で出かけるときは自分で調べていくが（それでも迷っている）、誰かと一緒だと絶対に、自分で調べようとしていない。

オレは、ある計画を考えていた。

「まだあ？」

「お前、本当に運動不足だな。ほら、いくぞ。」

後ろからゆっくりついてくる春男をのんびり待ちながら、オレは自分の計画に少々、うっとりしていた。

そう、遠回りをしているのだ。それにしても、まだ2時間も歩いていないというのに、どうしてこんなに

疲れているのだろう。本当に、完全なる運動不足のようだ。

「あー……。」。

なにやら、春男はうなっているが、じゃ、タクシーでも拾おうという考えがおきないところが春男らしい。そんなにお金を持たせなかったのが、正解のようだ。

「ほら、建物が見えてきたぞ。あれだ。」

「お。」

目標が見えたせいか、春男はいきいきして歩き出した。

まさか、あれが坂のかなり上がったところにあるとも知らずに。中を見終わって、出てくる頃には、かなり春男は疲れたようだ。だ
いぶ無口である。

「さつき、別の道から変える方法を教わった。帰りはちよつと早く帰れるぞ。」

「あー、ホントー？」

春男は少し笑った。帰り道は別にして、通常よりちよつとだけ、遠回りをして帰った。

「じゃあな。」

「おー。」

すっかり口数が減っていた。春男のアパートの前で別れたが、おそらく春男はそのままベッドにもぐるだろう。そして、明日は筋肉痛に違いない。オレも疲れたが、オレにもいい運動になった。オレはさわやかな気分で帰宅した。

翌日、オレは筋肉痛で悩んでいた。しかし、春男は翌日ではなく、その次の日に苦しめられていた。春男よりも運動不足ではなくて良

かったとオレは心から思った。

そして、春男ににこやかに声を掛けた。
「今度は、いつ、どこに行くんだ？」

春男の夢 (1)

春男の夢

春もすっかり、うららかなこの季節。しかし、会社の中はそうでもない。

マスクをしたり、くしゃみをしたり、なんともなかったりで、花粉に苦しめられるものとそうでない者がはつきりと分かれていた。そんななか、彼女はなにこともないかのように、オレのところへやってきた。彼女の名前は辻村 秀子。オレとは同期入社なのに、花の女性雑誌の担当だということは、オレでも知っていた。しかし、話したとはほとんどない。

「佐々木さん。」

「はい？」

「料理研究科のマキってご存知？」

「ご存知も何も、春男の母親だ。」

「え、ええ。まあ。それが？」

「佐々木さん、彼女の息子の担当ですよ？」

「そうだけど……」

「その息子さんの取材をさせてもらえませんか？」

オレは目を丸くした。

「春男を？取材？なんで？」

「今度うちの雑誌で、マキさんの特集を組むんです。そのために、色々調べていたら、息子さんが同じ集版社で作家をしているということがわかりましてね。それで、お願いに伺ったんです。」

「断ぶある！」

そういったのは、オレではなく、花粉症に苦しめられて、何を言っているのか聞き取りにくい事この上ない、編集長だった。

「まぎさんの、息子にあんなやつがあ、いるとは思われたくない。」

絶対い、やべろお。」

「あんなやつ？」

彼女は怪訝な顔をした。オレはこんな編集長の声が聞き取れたことに感心していた。

「そいつのペンネームは春男って言うんだけど、僕とは同級生でね。編集長は春男が嫌いでした。」

「あいつがあ、俺のまぎさんのけーぎにいやがらせをおしたんだ。」「

「いやがらせ？」

「いや、誤解なんだけど、解けてなくてね。ただ、編集長の意見はさておいても、たぶん春男は断ると思いますよ。」

「どうして？売れない作家なんでしょ？取り上げられたほうが本だって売れるし、知名度も上がるんじゃない？」

「いや、あいつの場合、あんまり顔を出したくない奴なので。本人の希望で。住んでいる家の周りの人も、たぶん、ほとんど、作家だつて知らないんじゃないですかね。」

辻村はあきれたように言った。

「それって、どんな人よ？人嫌い。変わり者。ほかには？」

「んー。友人はなぜが多いけど、春男のほうから友人たちのところへ遊ぶに行く姿はほとんど見た事がないし、外にも自分の趣味目的以外は出ないし、本当は食料品だって、買いに出かけるもの、嫌なんじゃないかな。それくらい、外に出たがらない。」

「そんなに・・・・・・？それって病気じゃない？」

「どうかなあ？病気というより、究極の無精者なんだと思いますよ。会いに行く事は出来るけど、どこかに自分が出るのは嫌みたいで。」

「会えるの？」

「会いたいなら。」

「やべておげー、どろわれるぞー。」

「編集長、聞きにくいですから、いいかげんに薬飲んでくださいよ。」

春男の夢（2）

「呪いねえ。……薬嫌いなのか？」

オレは首を振った。

「いえ、花粉に負けるような気がするから飲まないだけです。春男の件ですけど、……一応電話してみますよ。だぶん、直接本人に会ったほうが早いと思いますからね。……あ、春男？おれだけど。うん、実はマキさんの取材がてらお前に会いたい人が……うん、いる……あー。」

オレは彼女の服装を見た。

「あースカートだね。変わる？ちよい待ち。」

「はい。」

オレは携帯を差し出した。

「え？」

「変わってくれて。」

「もしもしお電話かわりました、私辻村と申します。あの……はい、いや……それは……ええ。……え？もしもし？！もしもし！切られた！ちよつとこの人どういう人よ！なんでスカートじゃダメなのよ！」

オレは説明した。

「あいつの家、よく荷物が届くんですけど、置くところがなくて、玄関先におきっぱなしになっているんです。それで、その荷物をまたがなきゃいけないので……。」

「あたし、明日パンツにしていくな。ダメっていつても佐々木君のストーカーになってでも会うから！」

どうも、オレの説明に納得できなかったのか、彼女は俄然、やる気になったようだ。

「そんなことしなくても、会っただけならいつでも平気だと思いますけど……。」

オレは苦笑した。

編集長の抵抗もむなしく？結局、オレは彼女は翌日の夕方、春男の
家に向かうことになった。

「春男！。」

「やあ、いらつしやい。」

にこにこ春男は笑っていた。

「はじめまして。雑誌の担当の辻村 秀子です。お母様のマキさん
の担当をさせていただいています。」

「どうも。きゅうり好き？」

「え、えーと、はい。」

彼女は急に聞かれて戸惑ったようだ。出した名刺も、そのまま手が
止まった。春男は名刺が差し出されたことにも気がつかなかったよ
うだ。

「春男、名刺。」

「ん？ああ、どうも。どうぞ。がんばってね。」

たしかに、これで、スカートなら大変そうだ。彼女は宣言どおり、
パンツで来ており、らくらくとはいかなかったが、荷物をよけるこ
とには成功した。

部屋の奥に行くと、まだ荷物がある。

「きゅうり？またマキさんからおくられてきたのか？」

「いや、田舎から。」

「そうか。」

オレはほつと胸をなでおろした。田舎なら、そんなに送ってくる事
も……。と、思ったのが甘かった。よくみると、ダンボ
ールが一つ。大きいサイズだ。

「おい、まさか、それ、全部きゅうりとか言わないよな？」

「言う。」

「えええ、あ、ほんとだ。」

秀子も覗き込んで目を丸くしている。

「大量に出来たらしい。」

「普通、近所におすそ分けとかじゃないんですか？」

「おすそ分けしたら、お返しがくるでしょう？その付き合いが面倒なんだって。」

春男の夢(3)

それを聞いて、オレは思った。春男の不精さは、もしかしたら誰かからの遺伝なのかもしれない……。

「すごい量ですね。全部食べるんですか？」

「無理。だから、あげようと思って、いま、袋に分けてるんだ。隣近所にも渡してくるけど、洋介も辻村さんも、もちろん、持って帰ってね。ついでに、うちで食べて行つてね。と、いうより、もうすぐできるから座つて。」

「んじゃ、ここ、どうぞ。」

台所の椅子に辻村さんを座らせて、オレはソファの後ろに隠れている、折りたたみ様の椅子を持ち出した。電球などを取り替えるときにしかでてこない椅子だ。春男は当然、普段つかっている椅子を転がして持つてくる。辻村はまさか、夕飯が出てくるとは思っていなかったのか、少々戸惑っているようだ。

「あの、机と椅子の数があつてないんじゃないですか？」

「んー。でも普段は私、一人だからね。別に椅子があつても邪魔なだけだし。」

しゃべりながら、春男の手は休んでいなかった。三人分、あれこれ、よそいでいる。

「あの、お手伝いしましょうか？」

「そう？じゃ、適当な皿にご飯よそつて。ご飯、ジャアー、そこね。」

「は、はい。」

彼女は、しゃもじを片手に、食器棚の中をのぞいたが……。

「あの。」

「なに？」

「茶碗は……。」

「ない。この間、割った。だから適当に何でもいいよ。」

何でもいいといわれて、彼女の手は止まっていた。オレはその様子を気の毒に思った。春男になれていないと、普通はこうなるだろう。オレは立って、かなり適当に食器を選んだ。

「えっと、これと、これと、……このへんでいいや。これで、お願いします。」

「あ、はい。」

サラダ一人分でも入りそうな皿に、彼女はご飯を入れた。その顔には奇妙な色合いが浮かんでいる。しかし、良く見れば、ほとんどの皿がばらばらで、まともにそろっている食器のほうが少ない。

同じ料理が乗っていても、皿が違えば、かなり変わって見える。

「えっとね、漬物と、サラダと、あと、海苔巻きに入れてみた。ごはんに、ごはんだけど、食べて。ほかに、思いつかなかったもんだから。そのままスティックで食べてもいいし、こっちはきゅうりとかぼちやのスープ。酢の物もあるよ。」

「暖かいきゅうりか……。」

「んー。こちらではあまり食べないかもしれないけど、南のほうへいくと普通にある料理だよ。ひやじるもあるよ。」

そういわれて辻村は、急に今日来た目的を思い出したようだ。

「あ、あの、春男さん。私、あなたのお母様である料理研究科のマキさんの取材をしているんです。」

「やせてるね。」

「……は？」

急に言われて、戸惑ったようだ。

「いや、母さんの取材をしている人って、だんだん太るんだよね。担当になってから、まだそんなに日数経ってないでしょ。」

「はい……あの、よくそういう方が来るんですか？」

「くる。母さんの取材に僕を載せようって人が。君も？」

「はいぜひ！」

「あれでしょう？僕があまり売れていないから、母さんの子だと分

「かれば、もっと売れるようになるって事でしょ？」

「なんだ、春男、知っているのか。」

「今までに何人来たのやら。」

春男の夢（４）

春男はきゅうりを味噌につけながら言った。

「あのねえ、私は別に本で売れて、一生食べて生きたいわけじゃないんだ。だからそんなに売れなくてもいいんだよ。賞も一度ももらたし。名前も覚えてないけど。」

「そ、そうなんですか？」

「うん。僕は本屋さんになりたいんだ。でもねえ、中オジが、いっぱい書いて言うから……。冊数が多いほうが本屋らしいだろう。」

秀子の顔にははてなマークが広がった。そうれはそうだろう。春男が言っているのは、オレと春男の家を三角形にむすぶことができる本屋屋の主人のことだ。

本名は、中山だが、春男は中山とおじさんをくつつけて中オジと呼んでいる。古い本屋で、オレからすると、おじさんが一人でやっている。

「その店の名前、変わってるんだぞ。西岡矢島円堂中ってなっているんだ。」

「……なんて読むんですか？」

「知らない。代々、継いだ人の名前が一字づつ増えていつてゐるんだと。で、今の中おじの中で、止まってる。あの本屋、変でさあ。

家系で継いでいつてゐるんじゃないんだよ。経営に失敗すると、名前は入れてもらえないんだって。」

「まて、入れてもらえないって……あれ、誰の店なんだ？」
オレも初耳のことに目を丸くした。

「さあ？ 誰かの道楽らしいよ。経営者だけが知っている秘密なんだとさ。」

「お前、そんな怪しい話に夢を乗せているのか？」

「うん。」

春男はにこやかに微笑み、オレはため息をついた。

辻村さんは、まさかマキさんの息子がこんなやつだとは思わなかったのだろうか、少々遠くを見るようにしていた。結局この日は、なにも言い返せず、きゅうりだけをもらって、帰っていった。

それから三ヶ月は彼女の姿を見ることはなかった。どうやら、春男を乗せるのは断念したようだ。マキさんのイメージダウンになるとも思ったのだろうか。決してアップすることがないだろうくらいは、わかったことだろう。

しばらくして、また雑誌担当の辻村がオレのところへやってきた・・・の다가。

「あ、あのさ。」

オレの言葉を彼女は制した。

「いい！言わないで。わかっているから。会う人、みんなに言われるの。あたし、もうすぐ、マキさんの担当下りるわ。春男さんの事は載せないわ。それだけ言いに来たの。」

「下りる？なんで？」

辻村は少々泣きそうに言った。

「なんで？なんで、聞くのよ。この体系見れば分かるでしょ！なんで、彼女太らないのか、わかる？代わりに周りが太っていくからよ。他の担当者にも会ったわ。会う人、会う人、みんな丸いのよ。それもなかなか戻らないんだから。」

そう。彼女の体型はたった三ヶ月で、なにかあったのだろうか？というほど丸くなっていたのだ。

オレは言葉に詰まった。春男もだんだん丸くなっていつているからだ。春男のオヤジさんが太らないのは、ほかに仕事をしているせいだろう。

またしばらくして、春男の母親である、マキさんの笑顔が特集記事雑誌の表紙を飾った。売上もなかなか良く、増刷も決まり、なかなかの評判だ。

しかし、春男のほうはといえば、結局名前も顔も職業もペンネーム

も載らず、有名になる事はない。そんなことはわかりきっていることだった。それにしても。

「お前、その本屋、もうちょっと詳しく聞いておいたほうがいいんじゃないか？」

「そう思っんだけど、まだダメだって。書いている冊数が足りないんだって。」

そういう問題かとオレは疑問に思う、今日この頃である。

母の日という日

母の日という日

穏やかなこの季節。花屋の店頭に、カーネーションが並ぶ頃、母の日がやってくる。大人になったら、母の日などすっかり忘れていたが、春男と会ってからはずいぶんオレも送るようになった。

なんのついでなのか、当然、春男が送るついでだ。

しかし、普通なら母親の欲しい物であったり、母親が使うものを送るものなのだが、ここの家はちよつと変わっている。それは、春男の家においてあるパンフレットで分かる。

「なんだ、今年は。」

オレは早速聞いた。

「なにが？」

「なにが、じゃない。これ、親父さんが持ってきたんだろう？」

春男の家では毎年、春男の父親が送る物のリストを送ってくる。もしくは自分の手で持ってくる。オレはそれをさっそくパラパラと見始めた。

「ああ、母の日ね。そう、今年はなんでも、いい鍋と、いいパン焼き機が出たらしくてね。どっちでもいいって。」

そう、春男の家の母の日のプレゼントは、春男の父親の欲しいもので決まる。使う頻度も、おそらく父親のほうが多いのではないだろうか。

「鍋………ねえ。じゃあ、ちよつと聞いてみる。」

「誰に？」

「オレの母親。どっちがほしいか。」

「そうだよねえ、普通は聞いてみるよねえ。」

春男はため息をついた。

「そっぴや、お前は聞かないのか？持っているものを贈ってもしよ

うがないだろ。まあ、親父さんが選ぶくらいだから、ないだろうとは思うが。」

「あー、母さんは自分がどんな鍋を持っているかなんて、気にしないよ。」

「そうなのか？」

オレは目を丸くした。有名な料理研究家がそんな事でいいのだろうか。

「うん。調理器具は、デザインで決めているみたい。それを父さんがそつと、こつちのほう機能がいいとか、サイズがどうか、助言しているみたい。」

「あいかわらず、仲がいいなあ。」

春男がくるりとこつちを向いて言った。

「そのパンフレットを見て、今年、僕が考えているのは、パン焼き機のほうだね。」

「なんでだ？」

「軽いほうが送料が安い。鍋のほうは性能はいいみたいなんだけど、重いみたいだ。重いと、洗うのも大変だし、大きいのを送って、料理を大量に作られても困るしね。」

「……なるほど。」

結局、今年の母の日は二人とも、パン焼き機に決まった。オレは母からかなり喜ばれた。わざわざ電話をよこして、あんたにしては珍しくセンスがいいとほめられもした。どうやら、誰か女性に選んでもらったと勘違いしているようだ。まさか、本当の事は言えず、オレは黙っていた。ばれても、嘘はついていないと言い張れるというものだ。

それにしても。

春男の父親は「パン、焼いたぞ。今回の機械はメロンパンまで作れるんだぞ。うまそうだろう？」といって、たまに持ってくる。

もらった当人よりも使い込んで、もらった当人よりも喜んでいる。

まあ、使わないよりかはいいかとオレは春男と焼きたてのパンを食

べながら考えていた。

ただ、一体誰のための母の日なのか、オレは少々疑問に思う今日この頃だ……。

父の日という日（前編）

父の日という日

雨の少ない六月の頭。

オレは別に、毎日春男の家に行っているわけではない。たしかに、最初の頃に比べて、確実に増えてはいるが、決して毎日ではないのだ。

そんななか、春男から、いや、正確には春男の母親であり、有名な料理研究科のマキさんから呼び出された。なにか、オレに用があるという。春男の家に行くと、彼女は笑顔で出迎えてくれた。

「よく、来てくれたわあ。」

「ど、どうも。」

春男の母親は、美人だ。しかし、しっかりしているような外見とは裏腹に細かい事はまったく気にしない女性でもある。それだから、細かい親父さんとうまくやっていけているんだろう。

それはともかく。

「あの、今日は？オレに何か用があるとか。」

「ええ、実はね、もうすぐ父の日でしょ？」

「・・・・・・。ですね。」

オレはすっかり忘れていた。どうして、春男の家のメンバー全員がイベント好きなのだろう。遺伝というものだろうか、性格というものだろうか。

「でね、あの人に、セーターを作ろうと思うの。」

あの人とは、当然、だんなさんの事だろう。おかしい、だんなさんじゃなくて、おとうさんはどうしたんだ？

「セーター・・・・・・ですか。」

オレは、春男の父親がセーターを着たところを想像した。どう、かみがえても、想像できなかった。それほど、春男の父親の顔は怖い。

実際に着ているところは見た事がないような気がする。

「僕はセーターより、着物の方がいいって言ったんだけど。」

春男は口を挟んだが、着物も怖い。

「あら、だって、着物じゃ、手で縫えないじゃない。」

「あ、あの。父の曰って、もうすぐですよね？」

確か、一週間後だ。

「そうね。」

「手編みですか？」

「そうよ。」

ケロつとした顔をしていった彼女に、オレはおそろおそろ聞いた。

「あの、編めるんですか？ いや、技術がどうのこうのというわけじゃなくて、時間的に。」

「あら、6月に、セーターが出来ても、着ないでしょ？」

「・・・・・・そうですね。」

「だから半年かけて編むのよ。」

彼女はにっこりと微笑んだ。・・・・・・それでは、父の日ではなく、クリスマスプレゼントになるのではないだろうか。

「それでね、編む前に体の大きさを知りたいんだけど、この子、太いんですもの。」

「はあ。」

確かに、春男は丸い。

「だからね。ちょっと体、貸して。はい、後ろ向いて。」

「はあ。」

オレは言うままに後ろを向いた。なにやら、長さやら、首周りやらメジャーで図っていた。そして、るるん気分でマキさんは帰っていた。

「うまくいったら、あんたにも編んであげるわねえ。」
「そういい残して。」

父の日という日（後編）

父の日という日（後半）

オレは思わず春男に聞いた。

「マキさん、編んでいる時間があるのか？オレの母親でも、手編み
つていったらえらくかかっていた様な気がするけど？」

当然のように、春男は、首を振った。

「あるわけないだろ。時間も技術もない！十二月までに、マフラー
でも出来ていたら、僕は拍手を送るね。しかも、初めての編み物で。」

「オレは目を丸くした。」

「初めて？いきなり、セーター編む気なのか？」

「そう。」

春男は一気にしゃべりだした。

「これから夏だっていうのに、毛糸の売っているところが少ないつ
て文句を言っていたよ。どっちが無理言ってるんだか。まずは、マ
フラーくらいからしたら？って言ったんだけど、デパートで見か
けたセーターがきれいだったから、自分で編むって言い出して。そ
れも、今年のバレンタインくらいに、見かけたセーターだよ？とに
かく早く、そんなことを忘れてくれる事を願うよ。父さんならまだ
しも、母さんじゃなあ……」

春男は再度首を振った。よっぽど、言い聞かせてやりたいようだ
が、きつと何を言っても無駄だという事を知っているのだろう。

「うちの母親は、もう目が疲れるから編まないって宣言していたけ
どな。」

「それで正解。父さんなら、三日で徹夜すれば、何とかセーターく
らい編める。けど、最初で半年……毎日特訓すれば出来る
んだろうけど、そんな時間、ないだろうなあ。」

春男はしみじみといった。

「まあ、できたら、奇跡だね。」

「・・・・・・それで、お前は今年、父の日には何を送るんだ？」

「酒。」

春男はあつさりと返事をした。

「酒？飲むのか？」

「飲む名目で、料理用にも使えるやつ。これが欲しいって自分で言うてきた。父さんも、父さんにそれを送るからね」

オレはちよつと考え込んだ。

「ん？父さんの、父さん？ってことは、お前の爺さんか。そういや、お前のところは、お爺さんも料理するんだよな。」

「そう。」

「マキさんのお父さんには何もないのか？」

「父の日に会いに行くからプレゼントはなし。」

「なるほど。会える幸せか。オレも、酒を送ろうかなあ。飲むために。」

オレはとりあえず、用も終わったので帰宅することにした。

「じゃ、またな。」

「おー。」

春男はまたパソコンに向かい始めた。帰宅途中、だんだん曇ってきている空を見ながら思った。

春男の親父さんがセーターをもらえる日は来るのだろうか。まあ、こなくても、親父さんは永遠にでも待っているだろう。

そして、春男にも作ってあげるといつていたが、そんな日が来るのだろうか。春男のなら、自分で作ってしまうかもしれない。

一体誰のための父の日なのか、オレは少々疑問に思うこの頃だ・・・

父の日という日（後編）（後書き）

これにて『春男の足元には（春編）』を終了します。夏編をそのうちお届けしますので気長にお待ち頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8518c/>

春男の足元には（春編）

2010年10月20日22時43分発行